

り、利己的で冷酷である。そこには人間的な苦しみが欠落している。このような現象は、宗教の教義や政治におけるイデオロギー信奉者に多く見る。このような人についてパウロは次のように言う。

わたしは彼らが熱心に神につかえていることは証しますが、この熱心さは、正しい認識（深い智慧）に基づいたものではありません。なぜなら、神の義を知らず、自分の義を求めようとして、神の義に従わなかったからである。（ローマの信徒への手紙十章二節以下）

×

×

人間的な我、又は自我が生み出す知恵による認識を義しいとし、それによって自己の救いを得ようとする態度を「自分の義」とパウロは言う。また、人の計らいを越えて、そのものが本来そうである神の決定による義しさのことを「神の義」と言い、その義に基づく認識行為により自己の救いを得ようとする態度を「神の義に従う」と言った。そして神の義はキリストの言動（即ち福音）の内に啓示されており、従って人の救いは人間的な知恵によらず、信仰によって実現されていくことを、パウロはローマの信徒への手紙一章十六節以下で次のように語っている。

わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、信じる者すべてに

救いをもたらす神の力だからです。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と旧約聖書に書いてあるとおりです。

人が、自分の義をもとにして、どれほど神の名をふりかざして熱烈に義よきさを語ろうとも、それは所詮「自分の義」であって人に救いをもたらす「神の義」とは関係無**い**ばかりか、かえって神の義を否定する罪の行為となり、自己を破滅させることになるという。これはパウロ自身の体験的告白である。

とにかく、彼は先に述べたとおりイエスの使徒たちが伝える「キリスト宣教」を受入れた。しかしパウロは、それをそのままに受け入れたのではない。つまり、観念的、且つ教条主義的原理として、それをそのままに信じ受入れたのではなく、いわば主体的実存的に使徒たちが伝えるキリスト宣教を受け入れたのである。ここを安易に看過してしまうと、パウロが語る福音理解を正しく頂くことが出来なくなってしまう。

パウロはペテロやヨハネやヤコブといったエルサレムに於ける原始教団の指導者である使徒達

とは、その意識において異なっていた。彼は生まれながらにしてローマの市民権を持つものであり、ギリシヤ、ローマ的な異教的雰囲気のあるタルソ市に育ち、その文化的教養を身につけていたエリートである。ちなみにローマ時代のタルソ市はキリキヤ県の首都であり、ギリシヤ哲学の学校もあり、キケロが知事をしていたこともある。キケロは、ローマの思想家、政治家修辞学者、哲学や文学に関する多くの著書をあらわし、古代ギリシヤの哲学をラテン語に訳し、アウグステイヌスなどに影響を与え、近代文学や哲学にもさまざまな影響力をあたえたといわれている人であることは一般に知られている。したがって、タルソ市からは多くの哲学者が輩出し、彼らはローマに行つて教えたと研究者は伝えている。要するにパウロはそのような文化の中で育つた。と同時に彼は、大ラビ・ヒレルを継ぐガマリエルの門下で熱心に律法（旧約聖書）を学んだ。ガマリエルを解説した書物などによると、「ラバン・ガマリエルの死と共に、律法の栄光は衰え、純潔と節制とが消えた」とミシユナに記されてあるという。使徒言行録には大祭司たちが教条的な感情に駆られて議場で弁明する使徒達を逮捕し殺そうと計つたとき、ガマリエルは一人議場に立ち、多くを諫めて語つたことが記されてある。その内容は彼の人柄と信仰とをよく語つていると思う。

これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒達を殺そうと考えた。ところが、民衆全体から尊敬さ

れている律法の教師で、パリサイ派に属するガマリエルという人が議場に立って、使徒達をしばらく外に出すように命じ、そこから、議員達にこう言った。「イスラエルの人たち、あの若者の取扱は慎重にしなさい。以前にもチウダが、自分が何か偉い者のように言つて立ち上がり、その數四百人ほどの男が彼に従つたことがあつた。彼は殺され、従つていた者は皆散らされて、跡形もなくなつた。その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従つた者も皆、ちりぢりにさせられた。そこで今、申しあげたい。あの者たちから手を引きなさい、ほうつておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことが出来ない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によつて話してはならないと命じたうえ、釈放した。(使徒言行録五章三三節以下)

×

×

パウロはこのような環境と状況の中に自分の身を置き多感な青年時代を過ごした。加えて、彼の性格は熱情的であり、その意志は人一倍強く、事柄を深く突き詰めて考える生得的なタイプは、彼の意識に存在状況が与える影響を倍加させたにちがいない。

ここで、確かめておきたいことは、その人の認識活動は、その者が持つ意識によつて決定的に

るうか。

十一 パウロが抱えた矛盾

一人の人間をその人に則して理解することは至難の業である。それは不可能なことだと言っても過言ではない。例えその人が自分と同じ環境と状況とに生きる同時代人であっても、その人を理解することは難しい。ましてや、全く異なる自然的精神的風土、加えて二千年も逆上る時代状況に生きた人を理解することなど、全く不可能なことだと言わざるを得ないだろう。私たちが問うている使徒パウロはまさにそのような人であることを忘れてはならない。

もちろん、パウロの場合、彼自身の文章が新約聖書の中に残されており、その文書を通してその思想と信仰とを伺い知る事が出来る。また多くの研究者が彼についての、さまざまに分野から問うことによつて、その研究成果を提供してくれている。にもかかわらず、パウロはやはり完全に理解されてはいない。

X

X

ある人がいて、その人が自分自身の思想や信仰や生き方について記した文章を、いくつか残したので、それを読めば、その人が理解できると思うのは軽薄な考えである。何故、彼を理解でき

ないのか、その理解出来ない深さは、人間存在の深さに比例しているからだろう。

人間の存在の深さは、神にまで通じる深さだといえる。それは、他でもなく言語を絶した深さの世界であり、人が及びもつかない世界なのである。このような言語が全く通用しない深い世界を、言語化しようとする事は愚かなことだと思う。言語化することとは、自我の世界までそれを取り出し、人間の知の世界でそれを合理化し、顕在化することである。そのことを一口で言えば意識的に理解する、ということになるのだが、そういう意味で人を完全に知り、認識するということば出来ない。一步譲って、それが少しはなし得るといふならば、慨然性の域を出ない。このことはパウロを論じる場合に於いても同じことだということを、弁えておかなくてはならないと思う。でないならば、「講談師見て来たようにものを言い」という誹^{そし}りをまぬがれないであろう。

それにしても、一つの宗教が生まれる場合一般的に言って、三つ条件が満たされなくてはならない。その一つはカリスマ性を持った教祖の存在であり、二つにはその教祖の言葉を教義として構築していく作業、三つには、その教義に基づいた宗団を組織する組織者が必要という条件である。勿論それらを一人で成し遂げてしまう場合もあるが、大抵の場合この三つの条件を備えて宗

教が社会的に出現してくる。このことは、政治的な主義主張を持った勢力が生まれて来る場合に於いても同じことが言えるが、さらに、両方に付け加える四つめの条件があるとすれば、それは資金力であろう。

×

×

しかし、宗教は一挙に完成の域に到達するものではない。すべての事柄がそうであるように、宗教も歴史的な時間の中で遭遇する様々な哲学や思想、文化、習慣などを、自分の内に抱え込みつつ、より強固な理論武装、教義武装をしていき、それが固定化されて絶対的な教義となる。伝統的な宗教とはそのようにして出来る。その結果、その教義の枠からはみ出す理解は異端とされ、その主張がどれほど正当性に富んでいても、その者はたちまち異端者として徹底的に弾劾され抹殺されなければならない悪魔とされる。このように自己の正統性を名乗る集団は、その護教学者の保護の下で神や仏をふりまわすことになる。このことは、「キリスト教」といえども決して例外ではない。事実、その歴史を振り返れば分かる。

×

×

パウロ理解に於いて、その理解の視点が後で述べるように固定化されているのではないか、と思う。このような思いは、素朴に聖書を読んで感じる事であって、パウロの思想や信仰を学的に深く研究しての思いではない。私には「パウロを研究する」などと言う学的な力量はない。

しかしそのように感じるのは、知の作業の結果ではなく、言葉を越えて響いてくる感じなのである。

禅の言葉に「言語道断直指人心」というのがある。これは読んで字のごとく、言葉を越えて直接心に至る、という一種の直観作用のことである。そのものの心底を直々に掴み取ることである。その場合、分かるのは掴み取った者だけにしか悟からない「それ」なのである。

もともと、パウロの宗教的実存の根底にある「それ」は、言葉を越えた「それ」である。であるならば、「それ」に共鳴し、触れ、且つ悟ることが出来るのは、あちら側（神）から、こちら側（人）に恵みとして与えられている「それ」以外にない。「それ」についてパウロは次のように語っている。

わたしたちは、信仰の成熟した人達の間では智慧を語ります。それはこの世の智慧ではなく、また、この世の滅び行く支配者たちの智慧でもありません。私たちが語るのは、隠されていた、神秘としての智慧であり、神が私たちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。この世の支配者たちはだれ一人、この智慧を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちに準備さ

れた」と書いてあるとおりです。私たちには、神が「靈」によってそのことを明らかに示してくださいました。靈は一切のことを、神の深みさえも究めます。人の靈以外にいたいだが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の靈以外に神のことを知る者はいません。わたしたちは世の靈ではなく、神からの靈を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。そして、わたしたちがこれについて語るのも、人の智慧に教えられた言葉によるのではなく、「靈」に教えられた言葉によつています。つまり、靈的なものによつて靈的なことを説明するのです。自然の人は神の靈に属する事柄を受け入れません。その人によつて、それは愚かなことであり、理解できないのです。靈によつてはじめて判断できるからです。靈の人は、一切を判断しますが、その人自身はだれからも判断されません。（コリントの信徒への手紙二 二章六節以下）

×

×

パウロの宗教的実存の根底で働いている「それ」を彼は、「人には隠されている神秘として神の智慧」と言う。そして、その神秘としての神の智慧は、神の深みさえも究める「神の靈」の働きによつてのみ知ることが出来るのだと言い、今、私が語っていることは、恵みとして与えられている神の靈によるものであると、彼は断言する。

神の智慧によつてこの世を観るとき、人の智慧によつて観ているそれとは、全く異なつて観え

る。人の智恵では、尊く価値ありと観えるものが、神の智恵で観るなら、それらは塵芥ちりみくたに等しい価値無きものに観える。また、神の智恵では、尊いことが、人の智恵においては厭いとうべき愚かなことにしか観えない。正に価値観の逆転が起こり、生き方に一大転換を起こすのが神の智恵である。だが、それは只の価値観の転換ということではなく、人を本来在るべき場に帰らしめ、そこに人を立たせることによって、生きていくことの尊さと有難さに気づかせ、永遠の平安へと人を生かすものこそ、神の智恵なのである。言うならば、神の智恵とは、どの人にも等しく恵みとして与えられている命の偉大さ尊さに気づかせる働きをするものである。そして、その働きをその人に、実現させるものが聖霊である。つまり、人をして本来の自然な在り方に在ることが宗教的実存なのである。そのように当たり前の意識で自分が生きるようになることを「価値観の転換」と言ったのである。では、そのようなパウロの宗教的実存にとって、イエスの十字架の死と復活とはどのような意義を持つのだろうか。

×

×

パウロがそれまでの生き方を捨て、キリストの使徒として生かされるようになった契機は、ダマスコへの途上で復活のキリストの顕現に接したことである。彼は、自分の「使徒」たる自覚と出発点について次のように語る。

人からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死人の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ。(ガラテヤの信徒への手紙一章一節)

さらに彼は、使徒としての召命は、自分が生まれる前から、ユダヤ人以外の人々に福音を伝える為に、神によって計画され備えられていたことであると言う。

わたしを母の胎内にあるときから選り分け、恵みによって召し下さされた神が、御心のまに、わたしの内に顕し示して、その福音を異邦人(ユダヤ人以外の人々)に告げ知らせるようになされたとき、わたしは、すぐに血肉(人の誰かに)相談するようにはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのものに行くこともせず、アラビヤに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。(ガラテヤの信徒への手紙一章十五節以下)

彼が、使徒たる自分の立場を、声を大にして語らねばならなかった背景には、さきに使徒として召された人たちとパウロとの間に「使徒職」をめぐる様々な軋轢あつれきが起こっていたことによる。

例えば、コリントの信徒への手紙に於いて、彼は訴えるように語る。

わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。私たちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主のためにわたしが働いて得た成果ではないか。他の人たちにとってわたしは使徒ではないにしても、少なくともあなたがたにとって使徒なのです。あなたがたは主に結ばれており、わたしが使徒であることの生きた証拠です。わたしを批判する人たちにはこう……。 (コリントの信徒への手紙一 九章一節以下)

×

×

以上のように、パウロの使徒職や福音理解を批判し反対する勢力が強力に働き、彼がその伝道に於いて形成していった教会が、反対者によって混乱させられていたことは確かなことである。コリントの信徒への手紙では「こういう者たちは偽使徒^{にせしよ}、ずる賢い働き手たちであって、キリストの使徒を装っているのです」(コリントの信徒への手紙二 十一章十三節)と言い、ガラテヤの信徒への手紙では、「あなた方が(私から)受けたものに反対する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい」(一章六節以下)と、彼は激怒して記している。

このような反対する者たちがどのような人たちであったのか、ということについては、いろいろと議論のあることで、ここではその問題は特に取り上げず、そのような勢力がパウロを悩ました事実を確認しておくことで次にすすみたいと思う。

×

×

以上のように、パウロの使徒としての自覚とキリスト宣教の出発点は、復活のキリスト顕現に接したところから始まる。この点について、「さきに使徒として召された人たち」であるペテロなどの原始使徒達、つまり十二使徒とパウロとは異なる。

ペテロをはじめとする所謂十二使徒と称される人たちは、生前のイエスと生活を共にし、その言動に直接接触し、見、聞いた。彼らは、イエスの教説や十字架、葬り、復活、昇天という地上的、歴史的な出来事に直接に関わつた人たちであり、そのところからキリストを認識する。言うならば、彼らは「肉のキリスト」からキリスト認識を始める人たちである。それに対して、パウロはダマスコへの途上で突如として顕現した復活のキリストとの衝撃的な出会いから、キリスト認識が始まるのである。両者に於けるこの相違は、キリスト認識、福音理解とその信仰の在り方に大きな違いを生ずることになる。

×

×

おそらく、パウロ以外の使徒と称される人たちは、生涯にわたつて地上に生きた師であるイエスの面影を、自分の内にさまざま形で引きずつていたに違いない。イエスに直接選ばれたという誇り、そして、そのことが、他の信徒達に奢りとなり、エリート意識となつていったかも知れないし、彼らが、そのようになったとしても不思議ではないだろう。事実、彼らはエルサレム原始教団に於ける指導者として働くようになり、いつしか、イエスの兄弟ヤコブが最高の指導者と

なつていくことを見ても、教団の指導部の意識が窺い知れる。しかし、一方において、ペテロはイエスを「知らない」と否んだ失態、また、イエスの逮捕、十字架刑を前にして師を捨てて逃げ去つたことへの悔恨の情を、自分の内に心傷として引きずつていたと思う。いずれにしても、彼らはこのようにして、自分の信仰の根柢を地上的、肉肉的イエスとの關係に少なからず置いていたといえる。この視点から、パウロに於ける「使徒職」の問題を見ると、問題点が少しは見えてくるように思う。つまり、使徒職の神的直接性が欠落して、地上的、肉肉的な視点から使徒職が規定されるという事が生じるだけでなく、ユダヤ教的、律法的な信仰理解から完全に開放されず、その残臭を何時までも引きずることになり、パウロは、その残臭と戦わねばならなかつたし、「使徒職」問題もその一端であつた。

×

×

パウロのキリスト認識は「肉のキリスト」から出発することを徹底的に否定する。

今後だれをも肉に従つて知ろうとはしません。肉に従つてキリストを知つていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。(コリントの信徒への手紙二 五章十六節)

「肉に従つてキリストを知る」とは、歴史的・血肉的にキリストを理解し、そこに寄り掛かるキ

リスト理解は今後ほしくない、とパウロは言う。これは、律法主義的生からの完全なる決別であり、復活のキリストの命そのものに生きるパウロの福音的生の告白である。

わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。(コリントの信徒への手紙二 四章十八節)

「見えるもの」とはさしずめ律法であり、地上的血肉的な肉のイエスに当たるし、「見えないもの」とは復活のキリストによって示された神の永遠なる命と支配そのもののことであろう。

×

×

「肉に従ってキリストを知る」限り、ユダヤ教的律法主義的生から開放されることはない。パウロは、原始教団の指導者であるペテロにその残臭を見、不徹底性を弾劾した。

ペテロがアンテオケに来たとき、非難すべきことがあったので、わたしは面と向かって反対しました。なぜなら、ペテロはヤコブのもとから、ある人々が来るまでは、異邦人と一緒に食事をしていたのに彼らがやって来ると、割礼を受けている者たちを恐れてしり込みし、身を引こうとしたからです。そして、他のユダヤ人も、ペテロと一緒にこのような心にもないことを行い、パ

ルナバさえも彼らの見せかけの行いに引きずり込まれてしまいました。わたしは、彼らが福音の真理にのっとって真つ直ぐに歩いていないのを見たとき、皆の前でペテロに向かつてこう言いました。「あなたはユダヤ人でありながら、ユダヤ人らしい生き方をせず異邦人のような生活をしているのに、どうして異邦人にユダヤ人のように生活をするかを強要するのですか。」（ガテテヤ人の信徒への手紙二章十一節以下）

×

×

何事に於いてもそうなのだが、「そうなるはずだ」とか、「そのようにしなければならぬ」といった前提でことがらを見てしまうと、必ずその見方や考え方に矛盾が出て来る。又一方に偏ってしまう。それでは、その事を正しく見ることは出来ず、自分の意識の底のところ「無理をしているのではないか」という思いが残る。

ものごとを正しく見るためには、どのような前提も持たないで、その事をそのままに見て、その結果が、自分の考え方や生き方に不都合であったとしても、素直にそれをそのままに受け入れなければならない。そうすることによってのみ、確かなことを掴むことが出来るのではないか。

とりわけ、主義主張の世界、また宗教的な信仰の世界に於いては、固定化された教義とその解釈について、疑問を抱き問いを發する者のそれがどれほど素直な問いであったとしても、問いに

ついで共に考えようとせず、簡単に自己の正統性を主張して、相手に異端の烙印を押しつてしまふ場合によつては、積極的に排除し、正義や神の名によつて抹殺してしまふことが起こる。このようになると、その集団は熱狂的な妄信集団と化する。

×

×

このことは、パウロの信仰理解に於いても同じ事がいえる。というのは、パウロの信仰を統一された内容として解釈しようとばかり考え、その前提でパウロを見るので、パウロが持っている矛盾が無視され、その結果パウロを偏つて見てしまうことになり、ひいては、パウロの信仰の根底が正しく理解されないことになる。パウロの信仰理解は決して、簡単に統一されない内容を秘めている。それが証拠に、今日もなお、彼の信仰理解について研究者はさまざまな論議をしている。詳細なことについては私などには分からないが、一人の求道人として、その事実を弁えておくことは、正しくパウロの信仰を理解する上で大切なことだと思ふ。

×

×

言うまでもなくキリスト教が拠り所としている聖典は三十九卷から成る旧約聖書と二十七卷から成る新約聖書である。これらは、それぞれに長い時間をかけて著されたものであり、一時期に一人の人が纏めて記したのではない。従つて、それぞれは他とは違う特徴があるが、その異なる書物を一貫して流れる内容を、世界を救う神の歴史的な働きの業——つまり救済史——の啓示の書

物として理解している。その意味に於いて聖書はキリスト教にとつては聖典なのである。しかし、聖書が統一された聖典であるということは、いわば総論に於いてであつて、各論に於いては事情は少し異なる。例えば、旧約聖書と新約聖書の関係、新約聖書に於いてはイエスとパウロの信仰理解の関係、原始使徒集団とパウロとの福音理解の関係などの問題があり、それらは互いに異なるが、その相違と共通、または、それらをどの点に於いて統合を見い出すのかといった問題がある。にもかかわらず、それらのことを無視して、單純に聖書を一つの教義によつて括つて、その理解を絶対的に正しいとして、すべてを統一してしまおうとすることは、必ず無理を生ずることになる。その無理が、今日の時代状況の中で明確化されて来たといえる。それはとりも直さず、私自身のキリスト信仰を問われているということとして具体化し、その結果、このように「わたしの問いつづけて来たこと」と題して、イエスの信仰やパウロの信仰を、私の信仰的実存に於いて、私なりに問うているのである。

結論的に言うと、イエスの信仰やパウロの信仰が、その根底に於いて示す世界には共通の場があり、その共通の場の事実には、宇宙全体の在り方の本来的且つ根源的な真実が、言うならば神の命として滾っているのを見るのである。この根源的な真実の命の滾りの現実をイエスは「神の支配」と言葉することで表現し、それ自身をその生涯の言動、とりわけ十字架と復活という出来事を生きることによつて示された。それがイエスの宣教内容であり福音といわれる事である。一方

パウロは、復活なされたキリストの顕現に接することによって、その福音の事実、即ち、根源的な真実の命の滾りに触れ、且つ開眼しそれを「復活のキリスト」として言葉したのである。つまり、イエスが「神の支配」と言葉し、パウロが「復活のキリスト」と言葉した事実はその根底に於いて同じ事実を示しているのである。このような見解は、既に八木誠一氏が提示するところであり、私なりにその理解に示唆を受け共感している。そして、イエスが言う「神の支配」と、パウロが言う「復活のキリスト」という事柄において示される根源的な共通の場を、私は「命の滾り」又は「創造に於ける自然」と言葉してきた。

×

×

パウロの信仰を理解する場合、一般には「律法と福音」「贖罪と義認」という枠組みでなされている。これは、パウロ理解に於いてだけでなく、イエス理解に於いても同じであり、従って、聖書全体、キリスト教全体がそのような枠組みで理解されている。そして、先にも言ったとおり、その理解の枠組みを絶対的な真実として、それ以外の理解の仕方を異端または悪魔的なこととして排除しようとする。

ここでわたしが提示していることは、パウロの信仰理解を「律法と福音」「贖罪と義認」という言葉の枠組みで統一的に理解してしまうことが問題なのではないか、ということであって、それ自体は一面に於いて有効であると思っている。律法と福音というとき、その意味するところ

は、神ヤウエがイスラエルの民を選び、神ヤウエとイスラエルの民が相互に平和な関係に立つ合意を結んだことが、旧約聖書にあるアブラハムやダビデ、またはモーセとの「契約」である。その中で代表的な契約が、シナイ山でモーセと交わされた契約、つまり「モーセの十戒」である。この契約に基づいてイスラエルの民が神ヤウエに対して守るべき義務が生じた。その内容が「律法」なのである。したがって、律法を守ればイスラエルの民を祝福するが、守れなければ祝福しない、という神の側から提示、と同時に、その律法を守る限り神は必ず祝福下さる、という民の側からの従順、この両者の合意が「契約」なのである。

ところが、イスラエルの民は現実の生活の中で律法を無視した行為やさまざまな違反を繰り返して「律法違反の罪」を犯し、その罪のために神の祝福を失って滅ぶ運命を背負うことになってしまった。

したがって、パウロが「罪」というとき、それは「律法違反の罪」なのだということを、再び確認しておきたい。

×

×

「罪」とは、律法違反であると同時にそれは「契約違反」でもある。その結果、神は契約に従ってイスラエルの民を罰し滅ぼすことになる。それを実行しなければ神の神であることの義が立たない。そこで、神は罪のない神の一人子イエスに罪を負わせ、十字架で滅ぼすことによって、

神の義を貫徹されると同時に、イスラエルの罪ある民をそのまま、神が罪なきものとして祝福を完成された。この「罪のない神の一人子イエスに罪を負わせ、十字架で滅ぼすことによつて」ということが「贖罪」ということである。また、この「罪なき者と承認し宣告することが「義認」、つまり「義と認められる」ということである。したがつてこの神による「義認」と宣告とが「福音」であり、それを実現させたイエスこそ「救い主」なのである。そして、イエスをキリストと告白し信じる群れは、やがてこの世が終わり、復活のキリストが再び到来しこの世を審かれるとき、キリストにつける神の群は神の国に加えられ、その他は永遠の死に陥れられ、世は完成する、というのである。パウロは以上の通りの信仰による教義を展開する。だが、彼が展開する教義の全てがこれに尽きるものではなく、むしろ、この教義と矛盾すると思われる信仰の教義を一方に於いて述べているのである。これについては、以下で考察していくことにして、ここでもう一度確認しておきたいことは、復活のキリストの顕現に接したパウロは、とりあえずエルサレムの使徒達が伝える次のようなキリスト宣教を受け入れたことである。「最も大切なこととしてわたしがあなた方に伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてあるとおり、三日目に復活したこと」——コリントの信徒への手紙一 一五章三節——

×

×

パウロの信仰を問うことは、「わたしをわたしとして持っているものは何か」を問うことである。それは「どのように生きれば、わたしとして本当に生きることになるのか」という答えを得ることになる。

人が「わたしを本当に生きる」とき、命としてのわたしを実感し、幸福と安心を得、本来の自己を最大に光り輝かすのである。光り輝いた自己は愛に結ばれた真実の世界を現成する。

このようにパウロの信仰を問うことは、ただパウロの信仰やキリスト教の信仰を問うだけに留まらず、広く人間の在り方、世界の在り方を問い、その答えを得ることなのである。人間にとつて永遠の課題であるこの問いに、パウロは確かな答えを得、それを人々に提示している。ここに現代にパウロを問うことの意味がある。

私は今、私なりにパウロが提示した問いと、答えとを、行きつ戻りつしながら問うているが、とにかくパウロは彼以前のキリスト宣教を受け入れた。これについては既に何度も述べてきたとおりである。そこでの中心は「神の義」であった。神の義とは、神とイスラエルの民との間に結んだ契約を、どうあつても神が完全に守るということである。繰り返しになるが確認しておこう。神はイスラエルの民に律法を与え、それを遵守する限り祝福することを条件として、民との間に契約を結んだ。しかし、民は律法を守らず契約に違反する「罪」を犯した。その結果、民は神の祝福から脱落し、滅ぼされるべき罪人となった。神はその義の故に罪を犯した民を罰し、滅ぼ

さねばならない。ここでもし、神が律法違反の民を罰しなければ、神の義は成り立たない。しかし、神はなお民との共存を願われ、それ故に、神の義を損なうことなく、神の願いを完成するために、民を罰し滅ぼす代わりに、罪の無い神のひとり子イエスを十字架につけ罰することによって、民の罪の身代わり、つまり贖罪とされた。それによって民は無罪とされた。これが、パウロ以前の、原始使徒達のキリスト宣教の内容である。ここでの中心は「神の義」である。

×

×

このようなキリスト宣教の内容をもう少し深く見つめてみると、次のような事柄が明らかになってくる。それは、この内容が極めて「律法義認的だ」ということである。つまり、一見して分かるように、その内容は法的な合理性による民への無罪宣告で貫かれている。法的には完全に民の犯罪事実が消滅されている。つまり、律法的には義と認められた、ということである。パウロの言葉で言えば、「規則によつて私たちを訴えて不利に陥れていた証書を破棄し、これを十字架に釘付けにして取り除いてくださいました」（コロサイの信徒への手紙二章十四節）ということになる。

ここで、もう一度確認しておきたいことは、この「義認」デシカイオシスつまり、義と認められるとは、法的な無罪宣告で貫かれているということである。というのは、律法的な義認のそこでは倫理や道義等といった感情、即ち、恵みや、愛といった価値の基準は排除されており、また、そのよう

な価値を法的な世界に持ち込んで、法的世界は成り立たない。この点を確実に抑えておかないと、次に述べる「信仰による義認」ということが正しく理解出来ない。

×

×

それにしても、このような「律法義認」による「贖罪」という考えを、イエスの十字架の死に見出したのは誰だったのか、という興味深い問題がある。もちろん、私にはわからないが、少なくとも、信じ、愛し、全てを捧げて従い、生活を共にした師であるイエスが、その愛と真実の故に、当時の権力集団であった宗教体制、政治的な支配者、加えて愚かな民衆等のエゴイズムによって、十字架にかけられ、無残な死を遂げねばならなかった。その事実を眼前にして、弟子たちはイエスの十字架による残酷な死の意味を、苦悩の内に問いつづけたに違いない。彼らにとってそれは、思弁のことではなく、その意味が見い出すことが出来なければ、自分の存在自体が否定されてしまうぎりぎりのところに立たされたのだ。不信、疑念、葛藤、祈り、もがきの内より、遂に、ユダヤ的な贖罪信仰に基づく宗教理解との関係に於いて、イエスの死を律法義認の贖罪死だったのだという理解に至ったのだろう。それは、まさに靈的な啓示であった。このようにして彼らがイエスにキリスト性を見い出したとしても決して不思議な事ではない。その時、使徒達は新しい自分の誕生、つまり新生を得たのである。そして、このキリスト宣教を人々に向かって語り出したのである。

事実、そのようなキリスト宣教に接した民衆（彼らの多くの現実には、律法を学び律法を守る労働条件も与えられず、ただその日のために働かねばならなかった。にもかかわらず、彼らは「律法を守らぬ罪人」「汚れた者」「地の民」「地獄に追いやられる滅ぶべき者」などと宗教体制側から蔑さげすまれていた。）彼らにとって使徒達が告知するキリスト宣教がどれほどの慰めと希望と喜びとを与える福音であったかということは、今日の私たちには想像出来ないことだろう。

×

×

「信仰による義認」を語る前に、もう少し「律法義認」が持っている問題性に目を向けておきたい。

律法義認とは、神ヤウエとの間で交わされた律法を民が遵守するかぎり、神が民を絶対に義と認めるということである。言うならば、生徒達が教師の出す問題に完全に答える限りに於いて百点という合格点を与えられるようなものである。つまり、律法義認とは、百点主義なのである。律法を完全に守ることに於いて合格点を得るという百点主義なのである。このような生き方を律法主義的生という。

ところが、先に述べた、使徒達がイエスの十字架の死は贖罪の死だと解釈することによって得た、「贖罪による義認信仰」は、その質と内容に於いて百点主義、つまり律法主義的だった

のである。このことについても少し説明しなければならない。

もともと贖罪という事が成り立つための前提には「律法義認」つまり百点主義、律法主義がなければならぬのである。その意味では、「贖罪」とは法的用語だといえる。そのような意味での贖罪による救いを得た者の結果は、確かに再び律法を完全に守ることによって神から義認を得ようとはしないだろう。しかし、彼の立っている場合は、自ら勝ち取った義認ではないにしても、やはり質的には律法的生なのである。つまり、彼はやはり、律法と自分との関係の場に留まっている生なのである。「贖罪」という事柄の内実には、このような律法的完全主義、百点合格主義がその基盤にあることを見逃してはならない。原始使徒から受けたパウロの信仰の中には、この「贖罪」信仰が大きな位置を占めているのである。

×

×

申すまでもなく、パウロの福音理解は「信仰による義認」である。それは神の律法を完全に守ることによって、神から義と認められようとする律法主義的生、つまり百点合格主義を徹底的に否定するところから生まれて来たものであり、ただ神が一方的に与えてくださる恩恵を信ずる信仰によってのみ義と認められる信仰である。彼は次のように明言する。

わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考える。――口

—マの信徒への手紙三章二八節—それ故に、信仰による義認における「罪」とは、神の律法違反が罪ではなく、むしろ、律法を守ることによって神の前に義と認められようとする「律法主義」的生の在り方こそが「罪」ということになる。

×

×

とすると、パウロの信仰の内には、「律法による義」と「信仰による義」という二つの義認理解が、相矛盾しながら微妙にからまって展開されている。一見統一されているように見えるパウロの福音理解、信仰理解の底に、その実微妙な矛盾がある。パウロはその矛盾を既に自ら気づいており、その統合を彼なりに、努力しているようにも思える。

×

×

パウロはダマスコ途上において復活のキリストの顕現に接し、その出来事を通して彼は「わたしをわたしとしているものが何だったのか」ということに開眼した。それは同時に、それまで「わたしをわたしとするもの」と思い込んでいた事柄（律法）からの開放であり、そのような自分の在り方（律法主義的生）^{よるこび}についての悔い改めであった。そのことが彼にとつて、どれほど福音であったかということ、次のように語る。

わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみ

なしています。キリストのゆえにわたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。(フィリピの信徒への手紙三章八節)

×

×

パウロにとって「キリストを知る」とは、自我が感覚的にキリストを対象化して認識することではない。それは、私が私に留まりつつ私の外にキリストというものを対象化して、私の意識で考え操作している私の知る作業にほかならない。このような作業こそ「律法による義」の実態であり、「肉によって知る」知り方なのである。だが彼は復活のキリストに出会うことによって「肉を頼みとする」生き方の決定的な間違いに開眼した。(フィリピの信徒への手紙三章一節以下) 「キリストを知る」とパウロが言うとき、それは、キリストが自己の真実の主体であることに開眼することを意味している。このことを彼は次のように言う。

わたしは神に生きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるのです。(ガラテヤの信徒への手紙二章一九節)

彼は意識的な自我が自己の主体だと信じ込んでいた。つまり、自分は自分であって自分以外の何者でもない、と自己自身について思い込んでいた。だからこそ、自我の努力で律法を遵守し神の前に完全になるうとする律法主義的生に自我を傾注させた。しかし、復活のキリストの顕現に接し自我よりも深い自己の主体（命の滾り）に生かされている自分自身、つまり、キリストがわたしの内に生きておられる自己の事実に見え、厳しい克己の生き方、つまり律法遵守とする生き方を見ると、それが、どれほど誠実に見え、厳しい克己の生き方、つまり律法遵守の生き方、さらに信仰深く見えようとも、その実、それは真の自己の主体を知らぬままに為される自我の虚しい幻想、自我意識の高揚、肉の思いの最たる高慢と偽善、罪そのものの何ものでもないことに気づくのである。だからこそパウロは、そのような自分の求道の在り方を振り返り「損失だ」「塵あくたのように見える」と言い、自分の内に生じたその出来事を「律法に対して自分は死んだ」と表現したのである。その意味は言うまでもなく、自我を自己の主体とする在り方、即ち「律法義認」の生き方からの開放であった。

自我よりも深い自己の主体（命の滾り）によって生かされている自分の発見は、意識的な自我の努力によってなされたものではない。言うなれば、一切に先立ってある根源的な事実、神のお

恵みそのものの事實に、彼は復活のキリスト顯現によって開眼させられた。それは、既にあるものを、あつたとする開眼なのである。その事實はこの世の智慧（自我意識）では知ることができず、（コリントの信徒への手紙一 一章十八節〜二章）ただ信仰によってのみ得られるのである。

ところが今や、律法とは關係なく、しかも律法と予言者によって立証されて、神の義が示された。すなわちイエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人はみな罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています。ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより、無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。（ローマの信徒への手紙三章二一節以下）

ここには使徒パウロの信仰の立場、福音理解が明確に語られている。しかし、よく聞くとき、そこに微妙に二つの立場が絡まっていることに気づく。そのことを知るために先にも紹介したコリントの信徒への手紙十五章三節以下で彼が原始使徒たちから受けたという信仰の使信をみてみよう。

最も大切なこととしてわたしがあなたの方に伝えたのはわたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおり私たちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと。(コリントの信徒への手紙二・一五章三節以下)

×

×

以上の二つの宣教内容を比較して分かることは、その贖罪解釈が、パウロ以前では法的且つ合理的であるのに対して、パウロのそれは信仰的且つ非合理的であるということである。具体的に指摘するなら、「恵みにより」「無償で」「イエス・キリストを信ずることにより、信じるすべての者に与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。」と彼は言う。

ここには原始使徒たちの福音理解とは明らかに異なった贖罪解釈がなされている。それを一口に言うなら、パウロ以前の贖罪解釈が律法義認的であることに対して、パウロに於いては信仰義認的であるということである。ここところはパウロの信仰を理解する上でとても大切なことなので、もう少し見つめてみよう。

×

×

イエスの十字架による死を原始使徒たちは、ユダヤ教の宗教理解に基づいて「贖罪死」と受け取った。しかし「贖罪」ということが成り立つためには、その前提に「律法義認」という義認理

解がなければならぬといふことは先に述べたとおりである。そして、律法義認とは極めて合理的なことがらであつて、百点合格主義であり、誰でも百点をとりさえすれば合格出来、そうでなければ不合格という性格を持ったものである。従つて贖あがないといふことは、それがどのような仕方であれ百点に満たされた故に合格と認められたといふことに他ならない。これこそ内容的には「律法義認」そのものだといえる。正に原始使徒たちの律法と福音という関係は、このような贖罪と義認の内容理解であつた。このような福音理解も確かに神のまえに於ける人々の救済として機能する事は出来る。その意味で、パウロは一応そのようなキリスト宣教を受け入れたのである。しかし、他の誰よりも律法的生に激烈であり、且つその生き方に悩み苦しんだパウロ、しかも、そのただ中で青天の霹靂ともいふべき劇的な復活のキリストの顕現に接し、律法的生から開放されたパウロにとつては、原始使徒たちの合理的贖罪理解をそのままではすんなりと受入れることが出来ないものを感じたのではないか。その理由は一体どこにあつたのだろう。

×

×

ローマの信徒への手紙七章に於いてパウロ自身激烈に告白しており、彼の自己の靈的救済、神の律法遵守は激烈を窮め、その苦闘も尋常のものではなかつた。言うなれば、彼の求道は極めて自覚的であり主体的であつたといえる。それに比べて、原始使徒達の求道は、その内容に於いて師であるイエスとの人格的な愛と信頼との關係に於いて保たれ、従つてその師の悲惨な十

十字架による死は、理解しがたい出来事であった。そこで彼らの関心事はイエスの死の意味が納得出来る答えを求め、その結果、その出来事をユダヤ教の伝統的祭義に基づいた「贖罪死」であったと解釈することによって納得できたのではないだろうか。それは一面客観的且つ律法主義的贖罪理解であったといえる。しかし、パウロはそのような贖罪理解に満足出来ず、彼は主体的に再解釈したのである。

×

×

キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。(コリントの信徒への手紙二 五章一七節)

これは使徒パウロの新生の歓喜である。この歓喜は、もはや彼が歓喜しているのではなく、歓喜そのものが歓喜している絶叫である。そこには自我の影が全く無い。そして、彼の歓喜は、次の告白で頂点に達する。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きているのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。(ガラテヤの信徒への手紙二章二十節)

×

×

原始使徒たちは、イエスの十字架の死に律法義認の延長として、ユダヤ人の罪のための贖罪を

見た。つまり、彼らはイエスの贖罪死に神の義の貫徹をみたのである。しかしパウロはさらに、その贖罪の事実に神の絶大な恩恵を見る。彼はそのことについて次のように語る。

キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對する愛をはつきりと示されました。(ローマの信徒への手紙五章八節)

恩恵とは旧約聖書においても、人の努力や願いに關係無く、神の一方的な賜物としての恵みの働きそのものである。パウロはイエスの贖罪死にそのような神の恩恵をみた。それは、律法義認という法的な關係が完全に無化されてしまったということである。こちらから為す一切の計らい、即ち自我的な努力を、完全に無化してしまふ神の一方的な愛による抱き抱えだつかかの働きを、パウロはイエスの贖罪に見た。その自我的努力の無化を、「生きているのは、もはやわたしではありません」と言い、神の一方的な愛による抱き抱えにある己自身の存在自体を「キリストがわたしの内に生きている」と言ったのである。そして、そのように有らしめられているそのことが「神の恩恵」ということに他ならない。

×
×
とにかく、パウロはイエスの贖罪に律法義認ではなく神の恩恵をみたのだ。そして、神の恩恵

に抱き抱えられた者に生ずる事はただ一つ、「信仰」だけである。信仰だけが神の恩恵に対するものなのだが、ここで誤ってはならないのは、「信仰」が「神の恩恵」に対して有効だということではない。それでは恩恵の条件が信仰のようになってしまふ。そうではなく、神の恩恵が恩恵によつて抱き抱えた者の内に信仰を自^{おの}ずと生み出すという「信仰」なのである。このことを心して、もう一度、先のパウロの告白に耳を傾けてみよう。

生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。わたしは、神の恩恵を無にしません。もし人が律法のお陰で義とされるとすれば、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。(ガラテヤの信徒への手紙二章二十節以下)

×

×

神の恩恵によつて抱えられた者の内に信仰を自ずと生み出す、ということとは、命の滾りの自然である。それは、愛によつて抱えられた者の内に、その愛故に自ずと平安が生ずるのと同じである。そこでは「応えるべきだ」とか、「応えねばならない」などという自我の計らいはない。強いる自我もなければ、強いられる自我も無い。あるのは、強いてでもなく、強いられてでもなく、

自^{おの}ずからの命のたぎりそのもの、正に「わたしの内に働くキリスト」そのものだけである。

このように「キリストに結ばれる人は、新しく創造された者なのです」とパウロがいうのは当然であり、したがって、ここでは、律法義認によって神の前に自分を立てようとする自我の生き方は「古いものとして過ぎ去り」、神の恩恵によって生かされる「新しいものが生じる」のである。正に「新しい創造」である。(コリントの信徒への手紙二 五章十七節) このようにパウロは律法義認の道と完全に決別する。即ち、「わたしは「信仰によって」神に生きるために律法に對して死んだ「関係無きものとして解放された」という。(ガラテヤの信徒への手紙二章十九節)

×

×

原始使徒たちがイエスの十字架の死を、律法義認的な贖罪と解釈したことを、パウロは、神の恩恵だと再解釈した。そして、その神の恩恵に開眼したそこで、神の恩恵そのものが人の内に主体の変革をもたらし、自ずと信仰を生ぜしめられるのだと先に述べたが、その意味でパウロは徹底して律法義認を否定した。ところがパウロは、その律法義認に對して「信仰義認」を立ててしまう。この「信仰義認」という表現は一見、神の恩恵から生ずる「信仰」という関わりで妥当な表現のように受け取られてるのだが、よく見ると、微妙な矛盾が見えて来る。

微妙な矛盾の所在は「義認」というところにある。彼は言う。

×

×

人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。……実に神は唯一だからです。この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださいなのです。それでは、わたしたちは信仰によって、律法を無にするのか。決してそうではない。むしろ、律法を確立するのである。(ローマの信徒への手紙三章二八節以下)

パウロは何度も、信仰によって義とされる、のだと強調する。確かにそれは正しい。しかし、義とされること、つまり義認とはもともと、「法廷における立場」であり「義ただしいという判決が与えられる事」である。即ち義認とは律法的概念である。さらに、パウロは、人が義とされるということを、イエスの贖罪に根拠を求める。

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっています。ただ、イエス・キリストによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を贖う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃

して、神の義をお示しになるためです。(ローマの信徒への手紙三章二二節以下)

パウロは原始使徒たちの贖罪解釈を再解釈して、贖罪を恩恵として受け取った。しかし、彼は原始使徒達の贖罪概念を手放すことをしないままで、律法義認に対して信仰義認を説いた。ここにパウロが説く福音が、聞く受け手側に微妙な矛盾を残すことになる。

ここに潜む矛盾はとても微妙である。律法義認を徹底的に否定したところに信仰義認が生じるにもかかわらず、信仰義認の内実の表現が極めて律法的なのである。贖罪という概念は律法主義を前提にしており、また義認という概念も律法主義を前提に成り立っている。徹底的に捨て且つ否定したはずの概念が前提になって贖罪と義認を成り立たせ、福音の中心に位置しているのがパウロの信仰なのである。

ここで断っておくが、わたしは今パウロの福音理解が誤りであるなどと言っているのではない。彼は人間の真の主体の何たるかを自分に得、それを多くの人々に語り、それを生き抜き、人間救済の道を示した。その意味で、彼が提示する福音は現代から将来に向かって、極めて有効且つ重要なものである。それだからこそ、パウロの福音理解を現代に明確化しなくてはならない。その

ために、パウロの信仰が持っている微妙な矛盾、即ち、パウロの信仰を一般に分かり難くしている、その部分を明確化することが大切である。だが、教会の伝統的なパウロ解釈に基づいた聖書理解の枠に異論を唱えるようなことは、例え素朴な者のそれであっても、多くの反発と批判とを覚悟せねばならない。しかし、信仰の事に於いてこそ、互いに徹底的な謙虚さが必要だと思う。

×

×

一見して善に思える努力が、よくよく見ると、それがおよそ善とは反対の方向に向かわせていることに気づくことがある。正に、律法主義的努力こそ、それなのである、ということにパウロは気づいた。その意味で、律法主義的生が持っている問題性を明確にしたところに、彼の優れている点があるといえる。ここで、もう一度、律法主義の正体ともいうべき事を再確認しておこう。律法主義が秘めている問題性を彼は端的に次のように言った。

文字（律法）は人を殺す。（コリントの信徒への手紙二 三章六節）

それに気づいたパウロは、ユダヤ教と決別した。

×

×

確かに「神の律法」は善を示しており、それを遵守して生きようとする者を善に向かわせるも

のである。もし人が、自分の在り方をその程度の認識に於いて留まっているなら、何の問題意識も生まれては来ないだろう。しかし、パウロはそのような生き方に潜む重大な欺瞞性に気づくのである。つまり、彼は神の律法を遵守しようと全力を傾けて生きている自分の姿の中に、自我に頼り、自我を誇りとし、自我の力で自己を神の前に立て完成させようとする自我意識を見る。それは他でもなく、神を排除し、自我絶対化の自分の姿に他ならないことに気づくのである。神を口で唱え、神の律法を振りかざし、神を崇め神を畏れて、神の正義に生きようとしている当の自分の姿が、その実、神のすべてを自我の智恵と努力で包み込み、自我を貫徹しようとする傲慢極まりない自我の正体に気づくのである。

彼は、そのような自分の姿について次のように告白した。

わたしたちは、律法が霊的なものであることを知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって僧んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めていることになりません。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうとする意思はありますが、そ

れを実行出来ないからです。私は自分の望むことを行わず、望まない悪を行っている。もし私が望まないことをしているとすればそれをしているのは、もはやわたしではなく、わたしのなかにすんでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつてこころの法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこになっているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、誰がわたしを救ってくれるでしょう。(ローマの信徒への手紙七章十三節以下)

×

×

ここでパウロが問題としていることは、神の律法を守って生きようと努力している自分の姿が、ふとわれに返ってみると、なんのことはない、神を排除して、自分の努力で自分を完成させようとしている者になってしまつていた、ということを告白しているのである。言いかえると、律法的生の努力は自我の傲慢を生む結果になつてしまつたというのである。

彼は神の律法を否定したのではない。律法を遵守することによって自分を完成しようとする律法主義の在り方に自我の歪んだ姿をみるのである。そのような律法主義的自我の生が持つ問題性に気づかせたのは、彼のたんなる自我による反省から生じたのではない。たんなる自我による反省とは、所謂自我が作り出した道德の規範または、社会的な通念が人に与えた良心による価値尺

度に照らしての反省にすぎない。そのような反省は、一見高尚に見えても所詮は自我の枠内での価値基準に基づく反省にしか過ぎない。つまり、神そのものの直接性から生ずる反省ではない。この両者の立場の反省を混同視してはならない。例えば、宗教的な禁欲が時として自我が生み出した憧憬としての信仰がつくりあげた規範によるものであったりする。にもかかわらず、当の人はその反省が神そのものの直接性によるものと錯覚していることがある。このような現象は熱心にキリスト信仰に生きていると自認している者のなかに、ときとして見受けることがある。キリストの十字架による贖罪死によつて、罪から救われた故に、それに応えるべく彼らは熱心に禁欲的生に励むのだが、その実、それは自我による律法主義的生の要求から開放されていない姿のものでもないという場合がある。その姿は、自我を基盤として成り立っている世俗主義的生を本質とするその裏返しにすぎないのだ。これこそ律法主義の落とし穴だといえる。

×

×

本当にその人をして律法主義的生から開放させるものは、その者が、神の直接性に自我を投げ込み、自我に死ぬことによつて現成してくる神の命の促しによつてであつて、たんなる道德的な良心の反省によるのでは決してない。つまり、神の恵みを信仰によつて受け、そこに滾なまる神の命を自己の主体として生かされるとき、はじめて律法主義的生から開放されると同時に、その主体が、律法主義が持つ問題性に気づかせるのである。その結果の告白が、パウロに於いては

「文字（律法主義的生）は人を殺し、靈（神の命を主体とする自己の生）は人を生かす」という言語表現となった。

×

×

神の命の滾りを自己の生の主体として生かされる実存体へと転換したことを、パウロは「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤの信徒への手紙二章二十節）と言う。

ここで注意しなくてはならないことは、彼は神の働きを自己の内に見る。自己の内にとは、自己の主体が神の命の滾りそのものである、ということである。そのような実存状況に於いては、内在の神は、同時に超越の神であるといえる。つまり、そこでの神は自己にとつて外にあるものでもないし、内にあるというようなことでなく、いわば、内在即超越の神なのだといえる。にもかかわらず、人は時として「キリスト教の神」を超越として関わり、その超越神に対する者として自己を設定してしまう。その結果神は、自己から遠く離れた聖なる「天におられる畏敬すべき神」となってしまう。ここに律法主義的生が人の側に生ずる。正に、神は畏敬すべき正義の命令者、監督者、審判者となる。文字どおり「父」性的な絶対的な権威者となる。そこでは、人は神の意思を「律法」の言葉（文字）によつてのみ聞き、それへの絶対服従によつて神のまえに自己の救済を得ようとする。それこそ律法主義的生であり、聖書主義的熱狂主義に連なるのである。

パウロはこのような律法主義的生をユダヤ教に於いて生きていたのだが、その生から彼を開放したのは、彼が復活のキリストの顕現に接することによって、自己の主体として内在している神（キリスト）の開眼によるのである。

「キリストがわたしの内に生きている」とは神を自己の外に見るのでなく、自己の内に見るということである。「文字（律法）は人を殺すが、霊は人を生かす」とパウロがいうときの霊とは、内在のキリストであり、自己の主体としての神である。それは、自己の主体としての神が自己の認識活動を、促し導くということに他ならない。そのとき、その者にとって「神の律法」は、もはや他律として自己を規制するものとしては働かず、自己の主体の、促しとして共鳴することになる。言うならば、神の律法が本来の「律法」、つまり文字としての律法ではなく「律法が霊的」（ローマの信徒への手紙七章一四節）なものであることを回復したことになる。つまり真の律法の面目を回復したことになる。そこでは、律法主義は崩壊する。形式的な聖書主義も無化されてしまう。つまり、「律法の文字」も「聖書の文字」も相対化され、真に「律法」が、「聖書」が命を得、万物の霊性と一致し、共鳴しはじめる。その現場の生を、「古きは過ぎ去り、見よ、新しくなった」とパウロは歓喜するのである。

わたしたちが「パウロの信仰を問う」ことの意義は、わたしをわたしとして生かしている主体は何か、ということに尽きる。これは、「イエスの信仰を問う」場合に於いても同じである。

通常、わたしたちは、自分を自分たらしめている自分自身の主体を、深く知って生きているとはいえない。ただまん然と「自分」を生きているのではないだろうか。「まん然」と自分を生きているとは、自分自身の存在を具体的にハッキリと掴むことをしないままで、という意味なのだが、たしかに、わたしたちは「自分」とは何か、ということを知っているつもりで「自分」を生きている。しかし、その実、わたしたちは、当の自分自身のなんたるかを、少しも知ってはいない。

×

×

わたしたちは、自分のことを「俺」といい「私」と称し、すべてはこの「俺」または「私」から出発する。しかし、その「俺」や「私」が何たるかということは決して問わないし、問おうとはしない。それは、自明のことであり、確かな前提だと思込んでいる。しかしパウロは、その「俺」や「私」という存在がどのような存在なのかということを次のように告白し、告発した。

義人はいない、ひとりもない。

悟りのある人はいない、

神を求める人はいない。

すべての人は迷い出て、

ことごとく無益なものになっている。

善を行う者はいない、

ひとりもない。

彼らのどは、開いた墓であり、

彼らは、その舌で人を欺き、

彼らのくちびるには、まむしの毒があり、

彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。

彼らの足は、血を流すのに速く、

彼らの道には、破壊と悲惨とがある。

そして、彼らは平和の道を知らない。

彼らの目の前には、神にたいする恐れがない。

(ローマの信徒への手紙三章十節以下)

ここでパウロは評論家の目で人間一般を論じているのではない。彼は、当の自分自身だとして
いる「俺」や「私」の現実の有り様を告白し告発しているのである。

パウロにとって問題なのは、「俺」や「私」に関係する外の者や事柄ではなく、当の「俺」自身、「私」自身が、問題なのである。

×

×

ここで、当の「俺」自身、「私」自身の主体を「自我」というなら、パウロが問題としたのは「自我」そのものの在り方である。そして、その自我がかかえる問題とは、ひとくちに言うなら、それは、「自分は自分自身によって自分以外の何者でもない」という自我意識と自我認識にある。それは言うなれば、利己主義的存在そのものだといえる。それこそが先にパウロが告白し告発した事なのである。

×

×

自分の主体が利己主義的自我だということは、自分の理性も感性も意志も肉体の働きすべてが、その自我に隷属したものだということである。ということは、理性も感性も意志も肉体も、正しい悟りを失い、迷ってしまつて無価値なものになり、ただ利己的自我実現のために神をも恐れず、その結果破壊と悲惨とを自ら招いているという。

そのような自我からの出発が問題なのだ。パウロは指摘する。理性や感性や意志が善か悪かと言っているのではない。それらが利己的な自我に隷属し、そこで自己実現、自己完成しようとす

る事自体が問題なのだという。そのような人間の在り方を彼は、律法の行いによって自分を義としようとする在り方と規定する。これこそ律法主義的生にほかならない。だから、「律法」が悪なのではなく、「律法主義」が悪なのであるという、この一点を、くどいようだがもう一度確認しておきたい。

これについてローマ人の信徒への手紙七章は、パウロが言わんとする事柄を的確に語っている。

律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が「むさぼるな」といわなかったら、わたしはむさぼりをしなかったでしょう。ところが、罪は掟によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内にお越しました。律法がなければ罪は死んでいるのです。わたしは、かつて律法とはかかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、わたしは死にました。そして、命をもたらすはずの掟が、死に導くものであることが分かりました。罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまつたのです。掟は聖であり、正しく、そして善いものです。

それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなつたのだろうか。決してそうではない。実は罪がその正体をあらわすために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。

このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通してしめされたのです。(ローマの信徒への手紙七章七節以下)

ここでパウロは大切なことを語っている。律法と自我との関係を、鋭い霊的な眼力で洞察し、自我がその内に秘めている問題性を見抜いている。まことに信仰人としてのパウロの面目が如実に現れている文章である。

彼は言う。「むさぼるな」という律法の教えに出会って、そうだ、わたしはむさぼらない者になろうと律法を守る。しかし、一見して善なる努力であるようなそれが、よく反省してみると、そこに恐ろしい落とし穴が隠されており、それに欺かれてしまっていた自分に気づくのである。つまり、むさぼる者にならないように熱心に律法を守り、自分を完成しようと努力するその事自体が、まぎれもなく「むさぼり」になっていくことの発見である。この在り方こそ、まさに律法によって自分を義としようとする「律法主義的」営為なのだ、彼は気づいた。

利己的自我を自分の基盤においたままで、どれほど立派な教え(律法)を遵守しても、所詮は利己的自我の業以外のなものでもない。否、むしろそのような努力は、ますますその者達を悲